随　筆

貴重な水辺のいくつか―5

アルハンブラ宮殿の水辺

亀田　泰武*

1. はじめに

スペイン，グラナダ市東の丘に立つイスラム様式の宮殿で，建物も素晴らしいが，中庭や庭園に噴水，池や流れなど水を多く使っている。アルハンブラの語源は，赤を意味するアル・ハムラであり，城壁に塗られた赤い漆食（しっくい）の色に由来する。

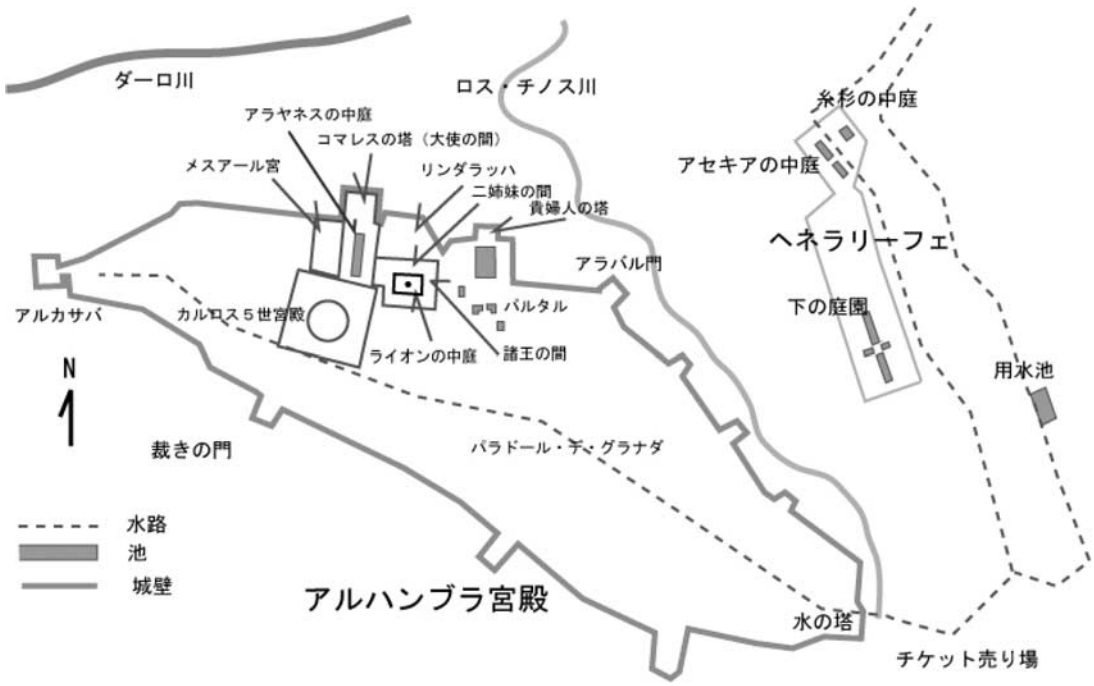
アルハンブラは構造的には一つの城塞都市であるが，当初から全体の形が計画されていたのではない。異なる時代に建てられた様々な建築物の複合体であり，時代により，建築様式や形状などが異なっている。アルハンブラの城壁は細長く，長さ７百メートル，幅が最大２百メートルで，この中に王宮だけでなく，住宅，官庁，兵舎，モスク，学校，墓地などがあり，人口約２千人の小さな都市のようなものであった。この外側に北の対岸のアルバイシン地区から，南の低地まで囲う長大な城壁もあった。

タルレガ作曲のメランコリックな「アルハンブラの思い出」のせいもあるのか，何か寂しげな雰囲気を持つ。今に残る宮殿を築いたナスル朝がはじまったのはキリスト教徒の反撃が強まった13世紀後半であった。滅び行く運命を悟りつつ何か後生に残るものをという覚悟で宮殿建設に取り組んだのであろうか。

2. 歴史

城塞都市のアルハンブラは昔からあったもので，現在の城の原型はイベリア半島で最初に栄えたイスラムのウマイア王朝（都はコルドバにあった）の９世紀末頃につくられた軍用砦であったとされる。

ウマイヤ王朝は８世紀初めの711年からたった10年でイベリア半島を征服したが，まもなくキリスト教側の反撃がはじまった。



*KAMEDA Yasutake，21世紀水倶楽部理事
URL　http://www.mizumirai.net/sitema/

レコンキスタと呼ばれ，718年にはじまったとされるが，異教徒同士手を結んだり，様々な王国が入れ替わるなど終わるまで複雑な経緯があった。

ナスル朝グラナダ王国が建国されたのは1238年。すでに半島南部のコルドバ（1234年）とセビーリャ（1248年）が陥落する情勢にあった。コルドバはグラナダからわずか130kmしか離れていないところである。

グラナダ王国初代のムハンマド・アラマール王はカステーリャ王国に服属し，外交を安定させ商工業の発展に努力した。経済発展後アルハンブラ宮殿に建設着手し，王宮は代々の王が整備を続けた。グラナダ王国はキリスト教国と共に戦うなど巧みな外交を駆使し，15世紀末まで生き残ったが，建国から２世紀半後，内紛を機にカスティーリャ王国に攻撃され，グラナダも包囲され，２年後の1492年に陥落し，宮殿はイサベラ女王に明け渡された。スペイン王朝はここを宮殿として用い，改修して新しい宮殿を建設するなどした。ナスル朝宮殿にくっついて外側が正方形，中庭が円形の大きなカルロス五世宮殿が建っている。ただ宮殿は財源難によって完成しなかった。資金源であったモリスコ（イスラムから改宗した新キリスト教徒）の反乱によってグラナダが財政難になってしまったからで，現在では博物館と美術館となっている。

スペイン王朝はイスラムの建築様式を尊重したようで，ムデハル様式と呼ばれる，イスラム職人につくらせた建物も多い。壊されなかったのは幸いであるが，改造などされて，昔と様子が相当異なっていったり，昔の姿がよく分からないものも多い。

写真－1　アルハンブラの城塞
アルバイシンの丘から。外側は無骨な城塞。右の四角の塔がコマレスの塔。遠くに夏でも雪が残るシェラネヴァダ山脈

3.　用水路

丘の上の城塞は軍事上は有利であるが水の確保が大変難しい。そこで初代のムハンマド・アラマール王は，後背に夏でも雪が残るシェラネヴァダ山脈を持ち，水量が確保できるダーロ川を６km遡ったところで取水して，緩勾配で丘沿いに水を運ぶ水路を建設した。

水路の流れは複雑で，取水地点から数百メートル下流で粉ひき用の水車を回した後，水道橋で川を渡り，途中で二本に分かれ，アルハンブラの隣の丘で，農園や庭園のあるヘネラリーフェに流れ込む。水路ははじめ１本であったが，後にヘネラリーフェの農園を灌漑できる高さを保持するため，途中で分岐して２本となった。水路はヘネラリーフェで1本になってアルハンブラとの間にある小さな谷を水路橋で渡り，アルハンブラ城塞に入ってくる。この水道橋を見張る，水の塔もつくられている。

このように上流で取水し，緩勾配で水位をかせぎながら宮殿の丘に運んでいるもので，丘の上の庭園に水を運ぶために水路をつくったという点で，金沢の兼六園に似ている。遠いところから水を運ぶカレーズなどの水利技術が使われたのだろう。

なおグラナダ市街の水道は，ローマ時代につくられたものが再構築され，上流の泉から給水路網が各戸や公共の水場，貯水槽に水を送っていた。

4.　ナスル朝宮殿

メスアール宮，コマレス宮，ライオンの中庭など，いろいろな建物が複雑に配置されている。王宮がアルハンブラの一部であったため，意外とコンパクトな宮殿である。また北の城壁にくっついて建てられている。

写真－2　アラヤネスの中庭（北側から）
池を水鏡として使用。向こうの柱廊の後ろにカルロス五世宮殿がそそり立っている

王宮の構造は非常にわかりにくい。正面玄関はなく，中心軸もなく，いろいろな部屋が隣り合う集合体となっている。各部屋は細密タイル，寄せ木細工，細かい彫刻，漆喰細工などによってきめ細かく装飾されている。城塞都市なのに王宮の柱はきゃしゃな細いものが多く，城壁の開口部も大きいなど不思議な感じがする。

5.　メスアール宮

スペイン王朝になって最も激しく改造されているので昔の姿を復元するのが難しいところである。メスアール宮はマチューカの中庭とアラヤネスの中庭に挟まれた建物で，北寄りにメスアールの中庭と呼ぶ，小さな噴水が一つある中庭を持つ。メスアールの中庭の西側建物はメスアールの間で，マチューカの中庭にも面していて裁きの部屋とも呼ばれている。後にキリスト教の礼拝堂となり大幅に改造された。中庭の北側は，黄金の間で，宮殿に立ち入る前の待合室であった。黄金の間の北側には祈祷室があり，部屋の向きがまわりと違いメッカ方向の南東に向いている。祈祷室の北側は城壁になっていて，対岸が見える２連アーチの窓がいくつも開いている。

メスアールの中庭は今では大理石の水盤の上に単純な噴水があるだけ。

写真－3　アラヤネスの中庭（南側から）
柱廊の向こうはコマレスの塔。中に大使の間

6.　コマレス宮

大きな池があって南北に長いアラヤネスの中庭を建物が囲んでいる。ここに入ってきた訪問者はコマレスの塔と柱廊が映し出された大きな水鏡を見ることになる。柱廊の前の床は少し傾斜していて，池の水が建物の土台ぎりぎりにせまって見え，柱廊の柱が水の上に立っているかのように見える。この水鏡の手法は３世紀後タージマハールで使われたとされ，イスラム文化の東端と西端でこういう素晴らしい遺産があるのに，イスラム世界の中心地域などではあまり聞かないのは何故だろうか。

アルハンブラで多い中庭を建物が取り囲む形式は，大昔からあるもので，紀元前1世紀頃まで栄えたギリシャのディロス島の多くの個人邸宅もモザイク模様など凝った中庭を，円柱を持つ建物が取り囲むこの形式であった。

池の両端のセンターには水盤の上に噴水が配置されていて水が池に落ちるようになっている。噴水の水量が多いと池の波紋が大きくなって水鏡でなくなるので小さな噴水だったと思われるが，動的な水が足りない感じがする。アルハンブラでは噴水は水盤の上か，床に彫りこんだ水盤の上に設置されている。

中庭の名前であるアラヤネスは，葉を揉むとさわやかな芳香が立ち上る常緑樹で池の両側に生け垣のように植えられている。池の北側は柱廊の向こうに横長のバルカの間，その北に大きなコマレスの塔があり，その下が大使の間となっている。バルカの間の入り口のアーチはムカルナス（鍾乳石飾り）と呼ばれる円筒の上にドームを乗せたものを縦に４分割したような多数のへこみなどで覆われ，蜂の巣のような感じである。

大使の間はきめ細かい細工が施された部屋である。壁一面が彫刻され，床に近い壁は落ち着いた色の細密タイル張りとなっている。天井は多面体で構成されるドームで，８千の部材を用いた寄せ木で花びらの幾何学模様をつくっている。この部屋は賓客が通された部屋であった。北側の壁のところは王の座だったようで，窓はステンドグラスにおおわれ，神々しさを醸し出していた。この部屋が，城壁からつきだして軍事的に重

写真－4　ライオンの中庭
中庭を細い柱廊が取り囲む。向こうに張り出しの三角屋根

要な大きなコマレスの塔の中にあるのが不思議な感じがする。

アラヤネスの中庭の南は柱廊になっていて，大きなカルロス５世宮殿が威圧するようにくっついて建っている。また東西は２階建てになっていて，２連アーチ窓が多用されている。２階は官吏の執務室であったとされる。

7.　ライオンの中庭

アラヤネスの中庭の東に隣接し，東西方向に長い長方形で，西の鍾乳石飾りの間と東の諸王の間には張り出しがある。張り出しは三角屋根になっていて，東南アジア的な感じがする。北側には二姉妹の間，南側にはアベンセラッヘスの間があり，各部屋とも豪華な鍾乳石天井や壁の彫刻が美しい。宮殿にこれだけ金をかけてしまったので，内政や戦時の備えがおろそかになって，国が弱体化してしまったのでないかと思われるくらいである。

ライオンの中庭を取り巻く張り出しや廊下の柱は細い円柱で，柱と台座など継ぎ目を安定させるために鉛が使われていた。中庭の回廊は，多くのキリスト教修道院などの回廊と似ている。

中庭の中央には一つの噴水水盤を取り囲んで12頭のライオンが，口から水を出している。ライオンといっても犬をデフォルメしたような石像で，西洋の正確な彫刻とは異なる。見学したときはライオンは修理か何かで台座だけになり，大きな木の囲いが覆っていた。中庭を取り囲む建物の中にも噴水があり，水溝がまっすぐライオンの噴水まで延びている。建物のなかに噴水と水溝を配置しているのは他に見たことがない。暑い時期に涼をとるためか，乾燥地域の人々の水に対するあこがれをあらわしたものであろうか。水溝が部屋の中に入り込むなど屋外との仕切りがないが，吹きさらしになる寒い冬ではどうしていたのだろう。

写真－5　噴水と溝細い柱が多数。諸王の間から。
張り出しの下と諸王の間の下の噴水が１列に。

中庭は現在小さな木が４隅にあるだけであるが昔は庭一面が緑と花で覆われていたということである。

諸王の間は５つの部屋からなる。中央の部屋には噴水があり，張り出しの噴水を通ってライオンの噴水まで伸びる溝でつながっている。ここから中庭を見ると，張り出しを含め多数の細い柱が目立つ。

アベンセラッヘスの間は天井が見事な鍾乳石飾りで覆われている。高い窓があり，光を取り入れると同時に暑い時期に換気口となり，噴水とともに空調の機能を果たしている。二姉妹の間も中央に噴水があり，高い窓を持つ。アルハンブラの天井が高い建物では高窓からの光は，角や柱を目盛りとする日時計になるような微妙な設計もなされていた。

二姉妹の間の左側にトイレに行く通路がある。トイレは床に細長い穴を開けた石版で，手洗い場，換気口が設置されていた。宮殿では配管による下水路が普及していた。現地で購入したガイドブックでトイレのことを後になって知ったが，公開されていないかもしれないけれど見たいものである。

写真－6　二姉妹の間天井
鍾乳石飾りが見事。高窓から光が

二姉妹の間の北側にはバルコニーがあり，２連アーチの窓からリンダラハの中庭を見下ろすことができる。中庭には中央に大きな噴水，数本の大きな木と生け垣で囲まれた花壇が配置されている。

二姉妹の間とアラヤネスの中庭の間には浴場があって，着替えの部屋，サウナ，浴槽，休憩室などがあり，接客などに使われたらしい。なお，アルハンブラの城塞の中には約10カ所もの浴場があった。

写真－7　貴婦人の塔　前の池が水鏡に

写真－9　貴婦人の塔側から

8.　パルタル

北の城壁にある貴婦人の塔の南に広がる段々の庭園である。池が多く，昔は宮殿の中庭であったとされる。

貴婦人の塔も細い柱で構成される５連アーチ，装飾など見事で美しい姿をしているが，19世紀頃ではアーチも埋められるなど改造され，住宅として使われていたのが復元されたものである。２階は展望室になっていて対岸のアルバイシン地区の景観が楽しめる。貴婦人の塔前面は大きな池で水鏡の役割を果たしている。

写真－8　貴婦人の塔上の池の一段上から。
くの字をした（写真では曲がりが見えない）
対称形の池の中央に噴水と溝が。

ここの眺望は上の池から続いていて，面白いところである。池の中心線に沿って階段が上まで伸びている。上の段にはくの字をした池が対称形で配置されていて，その真ん中に噴水があり，溝が下の池の方に向いて下に落ちていて，この溝と下の池の水の入り口が一直線上にある。階段も水の流れも今はつながっていないが，昔は溝が階段の中心を通って流れていたのではないかと考えられる。また上の池と下の池の間に段があって結構広いスペースがあり，昔はそこにも池があったような気がする。さらに，上の池の丘側に建物があって，貴婦人の塔の水鏡が見えるようになっていたのでないかと想像される。

池と溝を持つ階段を一直線に持つ設計を，近くに見ることができる。上の池から貴婦人の塔に至る軸線の西隣に，上の階段－池－下の階段という配置があり，上の段に行く通路になっている。上には階段室があり，そこから水が流れ出て池の段に降りる階段中央を流れ，池に入り，池の反対側から流れ出し，下の階段中央を流れていく。今は池だけであるが昔は池を挟んで建物があったと思われる。階段に溝をつくって水を流す設計は楽しい。現代の日本建築でも階段や通路と水路を近づける設計が増えているがこの原点と考える。

写真－10　隣の池と階段
下の階段と上の階段の水溝のラインが一致

対称形の池の上段にも庭があり，いくつかの池がある。この辺はユースフ３世の宮殿があったところで今は池と礎石らしいものが残っているだけで寂しい。

パルタルの庭園は貴婦人の塔から東に細く長く広がり，ヘネラリーフェに至る散歩道を形成している。

写真－11　隣の池
写真－10では見にくい。

9.　ヘネラリーフェ

宮殿城塞の隣の丘にあり，果樹園や農園が広がる中に王の別邸がおかれた。下の庭園，アセキアの中庭，糸杉の中庭などがある。用水路はここを通ってアルハンブラの城塞に入る。

写真－12　下の庭園

10.　下の庭園

20世紀につくられた庭で，昔のものではない。中央の噴水を挟んで十字に長短の池を配している。池の端にはアルハンブラの手法と同じく噴水を置いている。糸杉を中央噴水の角においたり，まわりに生け垣を作ったりしていて，西洋風な感じである。

11.　アセキアの中庭

建物で囲まれた細長い中庭に二つの細長い池が配置されている。池が細長いところがアラヤネス宮の池と異なり，あまり長いので中央に横切る通路をつくった

写真－13　アセキアの中庭
向こうの建物の１階は吹き抜けになってアルバイシンの丘が見えるバルコニーに至る。

写真－14　糸杉の中庭

と思われる。池の両側には花が植えられている。池の両側から多数の噴水が上がっていて，いかにも水と花に囲まれたオアシスというところであるが，この噴水は後世になってつくられたとのこと。池の両端には噴水がある（以前は中央にもあった）。北側の建物の1階は吹き抜けになっていて，アルバイシンの丘が見通せるバルコニーにつながっている。

中庭は1958年の火災の後，遺構が見つかり復元された。

12.　糸杉の中庭

U字型の池の中に噴水と植え込みが配置されている。グラナダ王国後世になってつくられたらしいが昔の姿はよくわからないとされる。現在糸杉はない。

13.　水の階段

糸杉の中庭から上の用水路水門に上る階段の両脇の

写真－15　水の階段
上から見たところ。踊り場にも噴水

写真－16　アルバイシンの丘
アルハンブラ宮殿から

手すりが溝になって水を流している。階段上に祈祷室があったため，お清めにつくられたとも言われている。

14.　終わりに

水辺を中心に書かせていただいたが，城塞，門など他に見るところも多く，構造が複雑なので見て回るのに一日は必要である。イスラム世界の辺境の地の小さな国でこれだけの芸術的，工学的な工夫がよくできたもので，噴水や水溝の水量が昔どれくらいであったかも興味の尽きないところである。現代の噴水のように

写真－17　コマレス宮入口
メスアールの中庭の南側

大量の水を使うということではなさそうであるが，ライオンの中庭など噴水はちょろちょろか停止の状況だった。水溝にある程度水が流れるくらい復元してほしいものである。

グループツアーで６月に訪れ，午前中はガイド付き見学，昼食は宮殿内のパラドール（古城や修道院などを改装した国営のホテル），午後は自由時間のスケジュールであった。現地ガイドはテレビでも見たことがある珍しく日本語が話せるガイドであったが，冗談ばかりで肝心の説明は詳しくせず，せかせて最後は自分の関係らしい土産物屋に連れて行き，おまけに昼食まで1時間も余すひどい扱いであった。せっかくの行程を無駄にするのが馬鹿らしく，添乗員と相談して入り口に戻り，再度入場券を購入した。ここはいつも見学者が非常に多いため入場規制をしていて，混んでいると買えないか相当待たされることになるが，幸い待ち時間２時間くらいの券が買え，明るいうちに再度見学ができ，撮り逃したところの写真もある程度撮ることができた。これである程度わかったが，これほど水に親しむ工夫をしているところは他にないのではないだろうか。特にパルタルは複雑で，逃した写真も多い。

参考文献

アルハンブラ散策　Edilux　S.L. ISBN : 84-87282-00-8